



日本の芸能に学ぶ

民族歌舞団ほうねん座 熊谷 めぐみ

今年もファミリー和太鼓ワークショップ&成果発表では大変お世話になりました。

ファミリー和太鼓ワークショップは、お父さんもお母さんも我が子と一緒に、同じ流れの時間を過ごし、同じことを体験し、学び、作り上げる1日。テレビもないし、ゲームもない。漫画もなければ、新聞もない。あるのは大自然と、太鼓とバチ。眼に映るのは、自分の家族。そして同じ目的で集まった仲間たち。自分のお父さんやお母さんが一生懸命太鼓に打ち込む姿、我が子が新しいことに取り組む姿勢、その眼差しの真剣さ…いつも見ているようで、もしかしたら見る機会がなかったその姿に「発見」や「驚き」もあるようです。

毎年恒例となっているこのワークショップは、初めから成果発表を目的として力を合わせて練習して行きます。自分の身体を通して、何かを表現するということは、意図せずとも多角的に自分を見ることにつながります。そして、同じことに挑戦し、取り組む仲間や家族がいる事は心強い励みになります。

日本の太鼓や踊りはいかにして受け継がれてきたのでしょうか。昔はスマートフォンも、ビデオも当たり前になかったわけですから、目で見て、耳で聞いて、声を出して、身体を動かして、五感をフル動員して覚えたはず。ビデオに撮ってまた後で、とはいかなかった時代、学ぶべきは踊りの振りや太鼓の曲といった単体の事柄だけだったのででしょうか。

芸能とはそもそも広域的なものではなく自分たちが暮らす（コミュニケーションが及び範囲の）土地の中で工夫をこらしながら受け継がれてきたのではないかと思います。地域には、その土地ならではの祭り、例えば夏祭りや秋祭り、盆踊りなどもあって、訛りや方言がある生活。世代間交流が当たり前の社会。要するに、生と死がもっと身近にあって、その土地ならではの拍子（リズム）があったのだと思います。一生を生き抜く過程であったり、会話の中の一瞬の相槌だったり、そうした「間」が生活の中の技や技術と相まって、芸

能が生まれたのかなあと思うのです。そうして生みだされた芸能は、その土地に暮らす人々の誇りそのものでしょう。だからこそ全身全霊、先人たちの言葉に耳を傾け、その匠の技や生き様に学び、自らの身を以て大切に受け継いできたのではないのでしょうか。

今この時代に、芸能を通じて何を感じてもらうか、感じてもらえるのか。それは芸能が連綿と受け継がれる中で内包されてきた生活する逞しさそのものだと思います。

今年もワークショップにご参加くださった皆様による成果発表が第30回みやぎの・まつりにて行われました。成果発表では、揃いの衣装に身を包み、嬉しさ半分緊張半分、全員で力を合わせて、力の限り太鼓を打ち鳴らしました。太鼓ワークショップも成果発表も、劇場のスタッフの皆さんに支えられながら、大成功を収める事ができました。発表を終えた皆さんと、全てを見守ってくれていたスタッフの皆さんの笑顔がキラキラ輝いていて、一緒にその場に居られることが本当に貴重なことだなあと思いました。

楽しいことも、ちょっと大変なことも、恥ずかしいことも、辛いことも、どんなことでも自分の心が動いた時、となりに同じように心を動かす誰かがいてくれたら何だかとても幸せだと思います。

せん社の皆さんが、たくさんの想いを込めて取り組んでくださる事業は、出会いがあり、多様に交流し、次につながる何かを生み出してくださっています。

私たち ほうねん座も人と人が出会い、感動体験できる、そんな『場』を作って行きたいと思いません。今年も素敵なお時間をご一緒させていただき本当にありがとうございました。

